

唯一無二のケアマネジャーの 価値を紐解く

著者の柴山志穂美氏は、ケアマネジャーの実務および地域のケアマネ連絡会会長を経験し、現在は大学で教育と研究に従事している。ケアマネジャーの仕事は、教科書通りにはいかない。利用者の数だけ方法があり、「失敗」も含めた経験の積み重ねが支援の質を高めるという柴山氏の言葉に深くならずケアマネジャーは少なくないのではないだろうか。実践者と教育者、さらに研究者の顔を併せ持つ柴山氏が、ケアマネジャーの価値を改めて考える。

ケアマネジメントとは、
人との関係性の中で育まれる専門性

「ケアマネジメント」とは、利用者一人ひとりの生活の願いを丁寧に紐解き、その実現に向けて多職種と協働しながら支援の仕組みをつくる営みです。私は、ケアマネジメントとは人との関係性の中で生まれ、実践の積み重ねによって磨かれていく専門性だと思うのです。

2000年の介護保険制度開始とともに介護支援専門員が誕生してから26年。制度は幾度も改正され、人口構造の変化、地域包括ケアの推進、災害や新興感染症といった予測不能な危機、さらにはAIの進化による「人が担うべき仕事」の価値の変容など、社会は大きく揺れ動いてきました。VUCAと呼ばれる不確実な時代だからこそ、ケアマネジメントの価値を改めて見つめ直す必要があります。

ケアマネジャーの仕事の魅力は
「実践の中で育つ力」

私がケアマネジャーとして働き始めた2000年当時、病院に行っても「ケアマネジャー？ 何だそれ？」と一蹴されることも珍しくありませんでした。しかし今では、ケアマネジャーは地域包括ケアの要

として広く認知され、特に入退院支援の場面では欠かせない存在となっています。この変化は制度の成熟だけでなく、現場で実践を積み重ねてきたケアマネジャー一人ひとりの努力の結果だと感じています。

ケアマネジャーの仕事の魅力は、利用者や家族との関わりの中で育まれる「実践力」にあります。実務研修に始まり、多くの研修やOJTを通して学び続ける日々ですが、人を対象とする仕事は教科書通りにはいきません。利用者の数だけ課題があり、方法があり、失敗も含めた経験の積み重ねが支援の質を高めていきます。

私自身、言葉の選び方が至らず意図が伝わらず、お叱りを受けたことがあります。しかし、その経験は利用者が大切にしてきた暮らしやこだわりの意味を深く考えるきっかけになりました。そして、モニタリング訪問を通して、利用者や家族から多くの「成長の種」をいただきました。1人で解決できない課題は、サービス担当者や知恵を出し合い、困難な状況を乗り越えるたびにチームの結束力が強まっていく。「また一緒に仕事がしたい」と思えるケアチームが生まれる喜びは、実践の中でしか得られないものです。



執筆 ▶
柴山志穂美

日本ケアマネジメント学会 理事
東都大学 幕張ヒューマンケア学部 准教授